

# 保育者の語りに見る人間性の育ち

## —多様な語り合いの本質的意義に関する考察—

The Growth of Human Nature in the Narrative of Education and Child Care Teachers :  
Consideration on the Essential Significance of Various Conversations

熊田 凡子\*・谷 昌代\*\*

### 要 旨

本稿は、日々の保育に関わる事項を様々な場面(出来事、雰囲気)で語ることによる保育者自身の人間性の育ちについて、つまり保育者が語り合うことそのものの本質的意義について検討する。

保育者が語り合う時は、どのような場面があるのか。例えば、教師会などの保育者の職員会議、毎日の朝礼や終礼等の連絡会議、保育の研究に関する研修及び研究会、保護者との交流会というように、保育運営上の形式的に定められた中で意図的に進めて行くものと、日々の保育の生活の中で保育者同士が何気なく語り合う時(清掃時、休憩時)、子どもの送迎時の保護者との会話などある意味日常的で無意図的に交わしているものがあるようだ。

本稿では、これらの様々な場面における保育者ら自らが語り合ったことを、実際の記録等に基づいて、語り合った保育のその後の変容を含め、人としての成長点を確認し、語り合うことの意義について検討を行った。

語り合うということは、人格と人格が触れ合う営みであり、あたたかいまなざしと寛容な雰囲気が連鎖している場であると言える。保育者同士が互いの理念を尊重し合い、どのような場でも本音で自身の内面を表出し語り合うことで、各々の考えや視点を知ることになり、新たに保育の営みを考えることに繋がるのである。

キーワード：人間性、同僚性、語り、まなざし、寛容な雰囲気

## 1. 保育者が語り合うこと—現代の保育士、教師の職場の人間関係による課題

日々の保育は保育者同士が支え合い、高め合っていく協働的な関係の中で営まれるものであり、「同僚性」の構築と促進がされていくことが求められている。

保育所保育指針では、保育士の資質向上や保育

の質を目指し、「全職員が自身の保育を振り返り、自らの課題を見だし、それぞれの経験を踏まえて互いの専門性を高め合う努力と探究を共に積み重ねることが求められ」、職員間において、「支え合っていく関係をつくるとともに、日頃から対話を通して子どもや保護者の様子を共有できる同僚性を培っておくことが求められる」と明記されており、その向上を目指すため、研修の体制や組織の体系的に考えていく必要性が掲げられている<sup>(1)</sup>。

大豆生田啓友は「保育者も『自分らしさ』が大切にされる同僚性」として、保育者も語り合う風土と個性が響き合う風土を挙げている。その上で、今後、「保育の質向上に繋がる、語り合う風

2021年11月30日受付

\* 江戸川大学 こどもコミュニケーション学科准教授  
乳幼児教育学・教育史

\*\* 北陸学院大学 人間総合学部子ども教育学科講師  
保育学・乳幼児教育学・特別支援教育

土を形成するための研修の質やファシリテーターの役割」が「豊かな同僚性を生み出す」と述べており、保育者が上記の「スキル」をもつことの必要性を指摘している<sup>(2)</sup>。

一方、有沢孝治は、保育士の対人状況で嫌な体験をした相手（同僚・上司、保護者、子ども）の頻度の違いについては、職場の対人状況では保育士は子どもとの関係に悩むよりも大人との関係で嫌な体験をしていることを示唆している<sup>(3)</sup>。また、本吉大介・細野弘美は、同僚や上司との関係形成における葛藤に対しては、どのように向き合っているのか明確でない可能性があること指摘している<sup>(4)</sup>。

以上、先行研究においては、多くの研究で同僚性を向上する機会つまり保育者が語り合うことについて、園内研修や職員会議といった話し合いの場の在り方に注目することや、また、その中でリーダーがいかに関与し保育士たちの力を発揮させることができるかということ、その話し合いの質の向上が保育の質の向上に繋がるという方法論を示すことに留まっており、実際の事例に基づいた保育者同士の育ちに繋がる考え方が明らかにされていないのである。

保育の質の向上を目指す時、各保育者による日々の保育実践の振り返りは欠かすことができず、またその振り返りを自己内に留めておくだけでは向上に繋がらない。各自が自己評価したものを省察し、保育者間、職員間で共有されることにより新たな子どもの理解、保育の理解が深まるものである。保育者間、職員間における情報共有をしていくための語り合う「場」が必要となることは言うまでもないだろう。

本稿では、保育者集団における互いの保育理解に必要とされる「多様な語り合いの場」や「語り合う間」に注目し、保育者自身の「人間性の育ち」について検討する。保育者が本音を語りたくなるような「場」（空間）（雰囲気）にはどのような要素があるのだろうか。そこで、実際の保育における語り合いの場面を取り上げ、また史料に基づき教師会での話し合いの歴史的意義も含めて事例に示して、保育者の多様な語り合いの「場」の

意味及び保育者が語り合うことの本質的な意義について論考する。

## 2. 幼稚園における「教師会」の歴史的意義 —キリスト教保育を事例に—

保育者が保育について話し合う会議は、今に始まったことではない。歴史を辿れば、日々の保育を振り返ることで、子どもの理解や今後の保育の展望、また保育者自身の生き方を見つめ直すことに繋がり、幼児教育・保育が継承されてきたと言える。このような営みについて、キリスト教保育の中では「教師会」という呼称で毎月行われてきたことが、月刊誌『キリスト教保育』より確認できる。

本稿では、昭和戦後日本の幼児教育及びキリスト教保育の指導者の一人であった南信子（1914-2003）の連載論説「教師会」（『キリスト教保育』1969年10月～1972年3月、1978年4月～1979年3月）の中から、南が示す「教師会」での視点、論点等を参考し、教師会そのものの意義について考えてみると共に、実際の教師会の内容や様子（雰囲気）等についても当時の記録を基に分析を試みたい。本節では、特に、こうした教師会のような会議が保育者にとってどのような「場」になっていたのか、検討する。

### 2-1. 南信子の「教師会」のテーマ

南の連載によれば「教師会」での話し合いテーマ（視点）を提示していることが分かる。「新学期」、「カリキュラム」、「自由遊びのあり方」といった教師が保育内容及び方法を省察する視点、「成長の原理」「欲求充足の原理」「興味の原理」「未分化性の原理」など子どもを理解する視点、「カリキュラムの構造化」「教育課程編成の原理」「学習（Learning）の原理」「行事の役割」という保育そのものの意味を問う視点、「人格形成の原理」「社会の原理」「キリスト教保育者の使命」というような保育者自身が人間の生き方を見つめ直す視点等、南は論説を通して「教師会」を営むことを示してきた。特に、南は、「教師会」とは

「幼児教育の本質を考える」、「将来のことを考えるだけでなく、今とこれまでを見つめる」機会となり、教師会を通じて「キリスト教保育を受け継がなければならない」ことを主張している。南が示す教師会の意義から、現代保育を見つめ直すことができるようだ。

## 2-2. 実際の教師会の内容

ここで、まず当時の教師会について、実際の記録を見てみよう。今回は、戦後1948年以降の一次史料の保育日誌等に基づき、その実態を明らかにすると共に、「教師会」そのものの本質的意義について考えてみたい。

本稿で取り扱う史料は、南信子が指導に関わっていた北陸保育短期大学附属第一幼稚園（現・北陸学院第一幼稚園）（以下、北陸学院第一幼稚園を記す）の『幼稚園日誌』<sup>(5)</sup>と『教師会』<sup>(6)</sup>の記録、及び北陸学院と同様にキリスト教主義幼稚園である東洋英和幼稚園（現・東洋英和幼稚園）『教師会』<sup>(7)</sup>の記録である。これらの詳細については後に取り上げた際に述べる。

まず、北陸学院第一幼稚園の記録より、教師会の内容について確認する。『教師会』ノートより、1952（昭和27）年の一部を記述のままに取り上げる。

11月6日

司会：ライザー先生

伝 25 マルコ1・14 - 20 200

### 1. 先週の報告

感謝祭 日が決っていなかった。

11月18日(木) 9時15分—10時—

母の会 電気、水道ガスが使える様になつたら知らせるといふ学院側からの返事。

水木金 都合悪い

火曜 25日はどうか

1回にする 実習は交替

感謝祭 クラス 顔合わせ

ふじ ばら すみれ

ゆり きく さくら

果物 野菜 をどうするか。

少し、果物を子供に食べさせる。当日みかん、次の日りんごか柿

後、どこかへ上げる。

聖霊病院 愛育学園

学生に奉仕 預る

### 図書祭に参加した報告

あいさつ 藤花 白銀

おどり

人形芝居

動く絵本

### 1. 事務より

薪代 会計に一任

観賞会切符 17枚分 1700円入

3枚貸

昨日玄関で申込書を集める。

月謝袋 11日に

### 1. クリスマス

12月18日 19日

母の会1回にする。

12月11日(水)

祝会 西田 石風 石浦 藤本

礼拝 井幡 森田 齊藤 南

日案 次週に出す。

### 1. 母の会幹事欠点をどうするか

役員会をして決めねばならないが、もう後3ヶ月だから、なくてもいいのではないか。

役員会 18日 午後

役員欠員の件、クリスマス

×× ××

### 1. 母の会

15名 火 } 北陸学院へ交流  
29名 土 }

このように、この北陸学院第一幼稚園の記録によれば、キリスト教主義幼稚園であるため、はじめに礼拝を行い、「1. 先週の報告」をしていることが記述から読み取れる。その後、「1. 事務より」「1. クリスマス」「1. 母の会」等へと続いていくように、事務的な連絡事項や次月の行事に向けての予定や計画を確認していることが分かる。1952年の段階で、教師会では、このように、幼

稚園教師が日々の保育を振り返り、それを報告し、今後の保育に関する見通しを行っていたのである。つまり、現在の保育の会議や研修において主張されている保育をマネジメントするといったことを、この当時においても「教師会」という保育者同士の語りの中で行われていたということが分かる。「教師会」では、礼拝、報告（各クラス）、事務的連絡事項、行事や子どもの生活遊びについて、また実習生についてなど<sup>(8)</sup>、さらに個々の子どもの課題について相談していることが記録に残されており、南信子の連載論説タイトルにあるような「新学期」、「カリキュラム」、「自由遊びのあり方」や「成長の原理」「欲求充足の原理」「興味の原理」「未分化性の原理」、「カリキュラムの構造化」「教育課程編成の原理」「学習（Learning）の原理」「行事の役割」、さらに「人格形成の原理」「社会の原理」「キリスト教保育者の使命」といった内容については、教師会での協議事項や研修の機会として取り扱われていたことが記録から確認できる<sup>(9)</sup>。

なお、本稿で取り扱うキリスト教主義幼稚園における「教師会」は、幼稚園教師の職員会と呼べるものであると言えるが、敢えて「教師会」という呼称で、1950（昭和25）年以降よりキリスト教主義の幼稚園で使用されている。北陸学院第一幼稚園や後述で取り扱う東洋英和幼稚園いずれにおいても保育者の話し合いや相談会を1950年度より「教師会」という呼称で行うようになっていることが、当時の保育日誌より確認できる。なかでも北陸学院第一幼稚園においては、幼稚園教師を指導する幼稚園主事であり戦後の日本のキリスト教保育の指導者であった南信子自身が幼児教育・保育を学んだランバス女学院附属幼稚園（後の聖和幼稚園、現・関西学院幼稚園）における幼稚園教師会の在り方を参考にし<sup>(10)</sup>、1948（昭和23）年頃では「相談会」と呼んでいた会の名称を、南信子が北陸学院に着任後の1950（昭和25）年以降より「教師会」という呼び名に変更した可能性がある。また、東洋英和幼稚園においても「相談会」や「相談」としていた営みを1950（昭和25）年以降より「教師会」と位置付けている。この点

については、南信子が、その後の月刊誌『キリスト教保育』において「教師会」の論説が連続掲載されていることから、1950年頃よりキリスト教保育連盟において、幼稚園教師の話し合い、相談会の呼称を「教師会」という呼称としていたことが考えられるため、ここに付記しておきたい。

このような「教師会」は、当時の記録（11月21日（土）の記録より）によれば、「次週教師会 クリスマスの相談」という記述があることから毎週行われていたことが分かる。それは、北陸学院第一幼稚園も東洋英和幼稚園においても同じであることが言える。

### 2-3. 相談会の実態（雰囲気）

次に、「教師会」と呼ぶことになる前の「相談会」時の内容について確認してみよう。

北陸学院第一幼稚園の場合は、当時の『幼稚園日誌』より確認することができる。なお、北陸学院第一幼稚園の保育の記録について、『幼稚園日誌 明治41年4月より』の記録から昭和戦後に続き、北陸学院史料編纂室に所蔵されている。1948（昭和23）年の日誌によれば、保育者が話し合う機会「相談会」があったようだ。以下の内容である（下線部は筆者熊田による）。

昭和23年4月26日（月）

晴天

今朝はからりと晴れた日本晴、早めのお礼拝をすまして皆、お庭に整列。

紅葉組の子供さんがすぐ見ええないと思ってる、他の組へ入ってすましている。やつと二人づつ並べて門を出る。子供さんは始めて歩くので大変に嬉しそう。お手々をつないでのお歌が時々聞える。松組藤組桜組は大体揃って歩けるが紅葉組の小寺洋子ちゃん、横井悦ちゃん伊藤輝夫ちゃんが端へ出て来て、危くって仕方が難しいので、手を引いて行く。やつと兼六公園の入口まで来る。電車、ジープ、トラック、大変賑やか過ぎて危険地帯。やつと公園に着く。しばしお池の鯉、菊桜等を見る。子供さんは鯉が嬉しいらしく長い事

見ていた。約二十分遊んで集会松組の責任を持たすは良い事と思つた。帰り川上幼稚園にお会いする。午後一時半より、ライザー園長先生と保育の相談会をする。お話の仕方・子どもに責任を持たす事・リズム・レコード購入の事等色々お話し下さって三時半頃終る。大変有益な話で有った。理想的にしたいと思ふばかりで何も出来ない私達に当る良き指導者が有ると思ふと私達は幸福だ。

上記の記録は、この当時の出来事を詳細に記した貴重な史料である。子どもの様子を「紅葉組の小寺洋子ちゃん、横井悦ちゃん伊藤輝夫ちゃんが」とあるように固有名詞を用いて、保育者の思いを込めて記録していることがうかがえる。下線部は、保育者らが当時のライザー園長と相談会を行った際の思いを記している。保育者の課題や不安な事柄である「お話の仕方」や「子どもに責任を持たす事」などについて、「理想的にしたいと思ふばかりで何もできない私達に当る良き指導者が有る」ことで、「大変有益な話」となり、「私達は幸福だ」と語り、ライザー園長の存在を敬うと同時に相談会には安心できる雰囲気があったようだ。その後の記録（1948（昭和23）年9月13日）によれば、「今日は午後二時よりミス・ライザーの処で相談会を開き」と、ライザー園長の処（部屋もしくは自宅）で行われていることが分かる。つまり、この当時の相談会は、「良き指導者」である園長という尊敬する存在がいることで、保育者が落ち着いて語ることができた場であったと考えられる。

#### 2-4. 相談会から教師会に（雰囲気の継続）

このような雰囲気はその後も保たれていたようだ。1950（昭和25）年6月8日（木）の『昭和25年度日誌 北陸学院附属幼稚園』の記録では、以下のように記されている（下線部は筆者熊田による。□は判読不能文字）。

毎土曜日の予定の教師会が都合により延期されて居たが、今週より毎週木曜行ふ事とな

り、各クラスごとの毎週司会と礼拝の奉仕を持つこととなる。今日は、南先生の司会で桜組で二時半より四時過ぎまで、ウイン先生も共に参加。なごやかな集まりを持つ事が出来て感謝でした。

打合せ事項として、今月のプランを次の様にした。

六月十日 花の日を催し、市立病院 廣坂警察 日赤診療所 横井病院 清□私寮とにカードと花を贈る事を行う。

六月二十日 母の会 大□□する 講話をして頂く予定。

七月二十一日 今学期の終園式を行う。

その他、学生が見学に来る時間の休息とミルクの問題について、程々相談する。各クラス今迄ミルクをのむ前に感謝をして祈るがそれを行ふ方がよいとの意見が出て実行する事になる、その時間を礼拝としてするのもしよとの事である。休息の時の子供の位置、態度などの事について考えた。

下線部にあるように、「教師会」と位置付けて行っている雰囲気においても、「なごやかな集まり」で、保育者にとっては「感謝」を感じる場であったことが記録から確認できる。その他、下線にあるように、意見を出し合い共に考えることで実行に繋げていたことが記録から読み取れる。

#### 2-5. 保育者の話し合いの共通性

また、北陸学院第一幼稚園と同様にキリスト教幼稚園である東洋英和幼稚園の「教師会」等の持ち方についても、触れておきたい。先に指摘したが、東洋英和幼稚園の「教師会」も1950（昭和25）年の保育日誌の記録より「教師会」が行われていたことが確認でき、それまでは昭和戦前期の保育日誌では「相談会」や「相談」という呼称で、保育者らが話し合っていたことが一次史料から分かる。次のような内容が主に記録されている。

その後の記録においても毎週水曜日の「教師会」が続いており、以下のように、各クラスの報

告と共に、子どもを理解できるように、個々の子どもの様子について詳しく記録されている。

1986年7月23日(水) 司会 坂井

クラス報告

全体を通しての事

九月の日程

ピークさんについて

☆クラス報告

かっこう……皆が積極的になってきた。

年長全員の男の子と一緒に遊ぶ事が多く、けんかも多かった。男の子だけで遊ぶ事が多い。

ちえ—ゆうこ(さ)のいいなりになっているところがある。

もう少し自分の意見を持っていいのではないか。

しんかん—ひとりでいることが多かったが、だんだん友達がお客さんになる等の形で交わるようになるが、乱暴に扱われたりするとおこったりたの遊びにうつったりする・

・次の遊びへ移るのがとても早く、片づけるひまがないくらいだが、家では、片付けから次のことをするようにしているので、幼稚園でもそうさせたい。

たいき } 面接では、お母様は、  
けんいちろう } だいじょうぶとおっしゃっている。(けんかの事について)

(中略：きつつき、うさぎ・りす組の報告を略)

☆第一学期目標について

昭和十二年度二学期参照

年長送りについて……地下鉄は必ず教師が三人つく。

やぶさん前のバス—山崎又は藤野

バス —丹羽

地下鉄 —北村・古川

坂下 —堤

☆ピークさんについて

りす組入る

☆九月日程

一日 午後教師会 始業礼拝プログラムについて かえでについて

二日火 教材室 かえで印刷 丹羽の配置替え

三日水

四日木

五日金 始業礼拝

このように、東洋英和幼稚園においても北陸学院第一幼稚園と同様に、クラスの報告、次月の予定など確認している点は類似している。特にクラス報告では、クラス全体と「ちえ—ゆうこ(さ)のいいなりになっているところがある」というような個々の子どもの育ちを捉えた保育者のまなざしが語られ記載されている点が見られる。子どもの育ちを中心にした保育を運営していくために、保育者らが積極的に語り合っていたことが「教師会」の記録から確認できる。

## 2-6. 教師会の雰囲気の変容

「教師会」の場は、はじめは、保育者が主体的に参加し、なごやかで、有益で、幸福を感じ、感謝できる語る場であったと言える。

ところが、このような「教師会」が、保育者にとって指導を受ける、受け身型になっていった傾向があることに指摘することができるのである。

北陸学院第一幼稚園『教師会』の記録(昭和37年9月1日(土))では、以下のように、南信子の助言内容が詳細に記録されているのである<sup>(11)</sup>。

南先生の助言

年少組

子供一人々々が自分の生活をいき／＼と持っているかどうかという事が重要な事である。

(中略)

年長組

個性がはっきりて来ているので、一人々々の個性をのばす、という事に重点がおかれる。

年少組でも二学期の初旬は生活に自信がつい

ている時である。この事はかかって仕上げなければならぬ。  
一人々々に心を配っているという事をねらいとする。(後略)

このように、保育者を指導する立場であった南信子の助言の言葉をそのまま記した実態が史料に残されている。記録によれば、「南先生の助言」「南先生より」と南信子が保育者らの報告及び相談に応じてコメントした内容が記録されているのである。「教師会」での語り合いが助言をいただく会へとなくなっていったようだ。これまでの相談し合い、意見を出し合い、時にはなごやかに過ごせる機会であった「教師会」が、指導者の威厳を感じるような雰囲気へとなったのであろうか、そのため保育者らが主体的に参加し語ることが困難な場になっていく傾向になったのかもしれない。

以上、キリスト教主義幼稚園における、保育者らが相談し意見を言える、また思いを語り合う場として継続されてきた「教師会」について、史料に基づきその実態を確認してきた。キリスト教主義幼稚園における「教師会」そのものの意義として、現在の継続されていることも含めて、次の継続性と変容点があると考えられる。

まず「教師会の継続性」としては、教師会は保育者の相談事が基盤にあり、保育者が積極的に語れる相談の場である、ということである。保育者が当時の保育の実態を語ることで、保育者の振り返りができ、また保育者同士が子どもの育ちを共有することにも繋がり、さらに今後の計画に発展していく、いわゆる保育を評価する及びマネジメントする視点が培われていたと考えられる。

次に変容点としては、教師会は、園長をはじめ保育者を指導する立場の尊敬する教師の存在や保育者同士で語り合うことによる安心できる場・雰囲気であったが、助言を受けることが中心になっていった可能性があるということである。指導的立場の教師は、保育者の相談を、穏やかに受け止めるまなざしを保ち、また相談内容的に的確に助言することができたと考えられる。ただし、指導的

立場である例えば南信子の助言を、威厳的に受け止めるようになっていった傾向があったため、「教師会」そのものが、保育者間では緊張する雰囲気に変容させてしまった可能性があることは史料から確認でき、指摘しておくべき点である。

このように、「相談会」、「教師会」では保育者が語り合い、和やかな雰囲気の中で人格と人格が触れ合い、保育者らは成長していったのであろう。これらの点は、現在の職員会や相談会における雰囲気に継承され類似する点があると言える。

### 3. 「語り」による、聞き手の認識に及ぼす影響 —実際の記録より—

ここでは、実際に保育者間で「気になる親子」として捉えられていた親子の姿を、日々の保育の中で語る担当保育者の「語り」により、その捉え方に変化が生まれていった過程をエピソードとして示す。

記録した担任保育者は他園での保育経験を含め10年以上経験のある保育者として、事例の保育施設に赴任した初年度の記録である。本稿で取り扱う事例は、個人の発達やその特性を分析するものではなく、保育者の語り合う場や語り合うことの本質的な意義を検討するものであるため、個人情報を取り扱ってはいない、あくまで語り合いの過程を提示するものであることをここに付記しておく。

『気になる親子が気にならなくなっていく』（担任保育者の保育記録より一部抜粋し加徐筆掲載）<sup>(12)</sup>

〈A君の姿〉

A君は年中組に所属し3月生まれの月齢の低い男児であった。A君は保育所には毎日喜んで通っているが、朝の登園後の所持品の整理をはじめ生活の一つ一つがゆっくりであった。また、気持ちにも波があり、一度自分の気に入らないことがあるとプイっとどこかへ行ってしまい、気持ちがなかなか切り替えられないことも多かった。例えば、大好きな泥遊びの後の着替えの際には、自分

だけでは着替えが進まないで、担任保育者が「A君、これに着替える？」とA君の棚から洋服を取り出しても、A君は「ううん」と首を横に振り納得しない。「これは嫌」「これは違う」と続き、結局自分で選んで着替えるまでに時間がかかってしまう。また、ゲームなどをする際も仲良しの友達と一緒にのグループになれなかったことにすねてどこかへ行ってしまったり、自分がうまくいかなかったことで保育室の隅に座り込んでしまったりするようなことも多かった。

このようなA君の姿に担任保育者は、「3月生まれだから…ゆっくりなんだ…」と自分に言い聞かせるように、日々「イヤイヤ」と自己主張し様々な形で思いを伝えているA君につきあいながら保育をしていた。

#### 〈その頃の保育者間のやりとり〉

担任して間もない頃、上記のようなA君の姿を職員間で話し合っていた際に、様々な保育者の意見があった。「本当にA君は月齢の低さからのゆっくりなのだろうか…」「気持ちの波の激しさは…?」「物事の切り替えがうまくいかないね」「一度すねてしまうとなかなか戻れない。」「こだわりみたいのが強い気がするね」などであり、担任保育者がA君への対応に悩んでいるだろうと共感するかのようになり、A君の姿についての課題点が次々と挙がり、少しでもA君が集団の中で穏やかに過ごせるように考えていこうとする意見が多かった。担任保育者もまた、同僚保育者たちの思いや助言を受けながらも、どこかA君を特別ないわゆる「気になる子ども」として理解されているように感じられ、そのこと自体に戸惑いながら、A君の育ちの先にどのような姿があるのかまだ想像できないまま日々過ごしていた。

#### 〈A君の母の姿〉

A君の母親は看護師としてフルタイムで勤務し不規則な生活を余儀なくされる毎日を送っていた。A君のことにはあまりゆっくり関わる時間もないようで、着替えを入れておく棚には洗濯済みではあるが、白いシャツは灰色になっているもの

も多く、サイズも小さくなった洋服がいつまでも入っている状況であった。毎日のお迎えも祖父母のことが多く、時々母親が迎えに来る時は、朝から「今日、ママお迎え」とA君は何度も嬉しそうに担任保育者や友達に伝えており、その日はいつになく機嫌よく過ごすことができた。あまり会う機会がない母親のお迎えの際には、A君の様子を伝えようとするが、母親は迎えに来るとすぐにA君を引き取り「ありがとうございました。」と足早に降園していった。まるで担任保育者からの声がかかるとを避けているようにも感じられた。

このような母親の姿は前年度にA君を担当していた保育者たちからも同じような状況であったことが伝えられ、A君の持ち物に汚れが多いことや送迎時の母親の表情などから、A君に対して母親は無関心なのではないか…という心配もしてきたことが分かった。

保育者間ではA君やA君の母親の様子から、対応が難しく「気がかりな親子」という認識が広がっていた。

#### 〈A君と母のエピソード〉

お正月遊びをしていた頃、A君は友達数人とコマ回し（紐コマ）をして遊んでいた。すると、A君が回し終わったコマを取ろうとした際に友達が回したコマが飛んできてしゃがんでいたA君の額にコマの先が当たるケガをした。額に少しだが血が滲み、担任保育者はA君を連れて病院に行くことになった。ケガをしたことを母親に連絡し事情を説明し病院に連れて行きたいことを伝えると、「分かりました。連絡ありがとうございます。うちの病院に連れて来てください」と言われた。急遽母親の勤務する病院へ向かうことになり、担任保育者はA君のケガの程度への不安と、日頃の母親との関係性からケガを負わせてしまった責任をについておそらく厳しいことを言われるであろうことも予想し、A君に「もうすぐお母さんの病院だよ」と声をかけながら向かった。

病院に着くと、看護師姿のA君の母親が待機しており、母親の姿を見たA君は安堵したのか笑顔になった。まもなく診察室に呼ばれA君は



額を3針ほどホッチキスで留めるような処置をした。A君の母親はテキパキと処置をしながら「A、大丈夫!強いね。」と声をかけ、申し訳なさそうに傍にいた担任保育者にも「先生、びっくりしたでしょう。そんなにたいしたことないので大丈夫ですよ。一応額の傷なので、頭の検査もしておきますね。連れてこられる時不安でしたでしょう。」と担任保育者の不安な思いにも寄り添う言葉をかけてくれて緊張していた思いが少し和らいだ。ケガをさせてしまったことを何度もお詫びした。全ての処置が終了し、A君と病院を出る際に「先生、この後もAをよろしく願います。気を付けて園に戻ってください」と見送ってくれた。

帰り道、担任保育者は思わずA君に「A君のママかっこいいね。看護師さんの姿、お仕事している姿、かっこよかったね。」と伝えると「うん!」と一番の笑顔を見せた。痛い思いはしたけれど、大好きな母親が格好良く働く姿を見てどこか誇らしげなA君でもあった。

〈ケガの報告を経て〉

通常、保育中のケガやトラブルなどが起きた場合は、事後に「ヒヤリハット」の一つとして報告し、今後このようなことがないよう原因の追及と体制を整えるために、職員間で共通理解に努める必要がある。

A君のケガの経緯と対応についても園内で報告することになった。保育者たちも心配しながら報告を聞いていた。

担任保育者は、今後の体制や見守り等についての報告をしたあと、病院で処置を受けながらA君の母親に対して感じた思いも併せて伝えた。

「A君のママが看護師の姿で爽やかに対応してくださったの」「テキパキと処置してくださり、とっても恰好良かったなあ」「処置中もA君に、強いねって励ましてあげていて心強かったし」「我が子がケガをしているのに、担任の私のことも不安だったでしょう、なんて気にかけてくださったんだよ。すごいよね。私、その言葉ですごく救われた気持ちになった」「病院を出る時に、よ

ろしくって笑顔で見送ってくださったよ」など。そして母親の姿を嬉しく受け止めているA君の様子も併せて伝えたのである。

保育者たちは、担任保育者から語られる今まで見たことのないA君の母親の姿に驚き、新たな一面を窺う機会となっていた。「へー、そんな姿見たことない」「今まで我が子のことにあまり関心がないのかと思っていたけど」「処置中のその言葉はA君にとって嬉しいね。安心できたね。」「先生のことを気かけられるなんて、いつもあまり表情や反応に変化がない方だと思っていたけど…」など口々に発言している。今までの印象とのズレに対して、どこかその人のことを決めつけるような偏った理解をしていたことを振り返りきっかけとなったようであった。ケガの報告ではあったがその後はあたたかい雰囲気が流れた。

本事例は、「気になる子」であり、「気がかりな親子」と捉えていた担任保育者をはじめとする保育者たちの子ども観、保育観、人間観の新たな気づきとなる立ち止まる場面があった。担任保育者とA君との日々の関わりから捉えるA君の理解、日常の母親の姿から感じていた人間を見る目が、A君のケガという出来事によって新たにされていたのである。そのことを保育者間で共有することで、保育者たちの「気になる子」であり「気がかりな親子」であったA君と母親に対する見方が寛容なまなざしへ変化し、さらにそうしたまなざしによって、園全体が寛容で柔和な雰囲気(場)を生み出していったと考えられるのである。次の3点から考察することができる。

### 3-1. 保育者の内面にある価値観・人間観

日々の保育の営みの中で子どもたちとの様々な場面に直面した際、保育者として、人間として、その場面をどのように捉え対応するかは常に問われ続けている。本事例では、まさに保育者自身の内にある価値観や人間性とその応答に表現されるのである。保育者は、月齢が低い手にかかるA君を受け止め、その母親がお迎えの際にA君の様子を伝えようとしても「ありがとうごさいまし

た」と足早に降園し避けているような姿やA君の持ち物に汚れが多いことも含めて母親の無関心さから、母親のことをもしかしたらネグレクトしているのではないかと心配までするような捉え方をしていたのかもしれない。そうした認識は、園全体の保育者たちにも伝わり共有していたようである。つまり、保育者は、出来事のどの場面を切り取り、どのように伝えるかということで、聞き手に与える印象や影響は大きく左右すると言えるのである。保育者の内面にある価値観や人間観が伝えられていくということなのである。

### 3-2. 心が動く 関係性の構築

事例ではともすれば、「ヒヤリハット」に終始し報告のみで完結する場面であったが、その流れに担任保育者の心が動かされ、それを「同僚保育者に伝えたい」と心が動き語ることができたことはその後のA君親子に向けてまなざしに変化をもたらしている。担任保育者が病院では手際よく処置し「A、大丈夫!強いね。」と声をかける母親の姿に、感動するのであった。しかも母親の担任保育者に「先生、びっくりしたでしょう」「そんなにたいしたことないので大丈夫ですよ」「連れてこられる時不安でしたでしょう」と寄り添う様子が、担任保育者の気持ちを柔らかくさせ、その場の雰囲気や和ませたのである。さらに、この場面の雰囲気や和ませたA君にとっても安心する場へと変わったのではないだろうか。

このようなはじめて触れる感覚、人格と人格が触れ心動かされた担任保育者の思いと、また母親の働く姿を誇らしげにするA君のことも含めその場面を同僚に伝えたのである。つまり、この保育者自身の心が動いた場面を同僚に伝えたいとなるような関係性の構築、また保育者とA君親子との関係性の構築いづれも、人格と人格が触れ合う中で、新たに分かち合うことに発展していったのである。

### 3-3. 寛容な場とまなざし

本事例では、保育者たちは、「無関心」「表情や反応に変化がない方」と理解していたA君の母親

の新たな一面を担任保育者の語りによって知るのである。そこには、今まで親子に抱いていた印象とのズレや、決めつけて偏った理解をしていたことを振り返るあたたかい和やかな雰囲気や醸し出されたのであった。伝え合える場に寛容な雰囲気があることで、保育者間で「気になる親子」であった親子への見方が、保育者の語りにより親子への周囲の理解が変化していく契機となり、さらにはあたたかな保育者たちのまなざしをA君親子をはじめ全ての子どもたちに向けていくことに繋がっていくようだ。さらに、そうしたまなざしが、柔らかい寛容な雰囲気を創り出していくのではないだろうか。

## 4. 保育者が語り合うこと・語り合う「場」の意義(雰囲気・保育者自身・時間・場所)

本稿では、保育者集団における互いの保育理解に必要とされる「多様な語り合いの場」や「語り合う間」に注目し、保育者自身の「人間性の育ち」について検討してきた。保育者が本音を語りたくなるような「場」(空間)(雰囲気)にはどのような要素があるのかについても含め、語り合うことの本質的な意義については、次の3点より考察することができる。

第一に、保育者が語り合うことの意義として、語り合うのは、人と人であり、人格と人格が触れ合う、つまり感じ合い気づき合い思い合い分かち合うことができる営みであるということである。保育における子どもの成長は、子どもの人格の交わりによって起こる。保育者は子どもと共に成長していく存在であり、保育者自身の人間として成長が重要である。保育者が、子どものこと、保護者のこと、保育のことなどを多角的に語り合うことは、必要なことであり、大切である。保育者が、園の建学の理念、歴史、伝統、教育方針を理解すること、実践する保育者の世界観、保育・教育観、人間観、子ども観、発達観等が保育に大きく影響するのである。保育者が、園の大切にしていることを理解していくこと、また世界観、保育・教育観、人間観、価値観、発達観等を豊かに

していくためには、他者と語り合うことが一つの方法である。理念を認識し、保育の中で何を目指していくのか、子ども自身がどのような生活経験をし、そのことを通して何を学ぶのかを考えることは大切なことである。理念、生活経験、学びについて、語り合い共有することが重要なのである。しかし、語り合う時（時間と場）を持っているだけでは不十分であり、本稿で取り上げたように、指導者から助言をいただくだけの会になっては、保育者の本質的な成長には繋がらない可能性があることについては指摘できる。

第二に、保育者が語り合う時は様々にあるということである。保育中の保育者同士の会話、保育終了後の保育室で、職員室で休憩中に、教師会で、園内研修で等々。また、語り合いを考える視点として、語り合うことを保育者自身が必要としているのか。園として必要としているのか。それはなぜなのか。語り合うのは、いつ、誰が、どのような場所で、どのようなことを等々、様々ある。こうした場面において本心で向き合うことが重要である。そこで、気づき、分かり、改め、見つけ直すのである。つまり、保育者が本音で語り合える場であれば、その場は、保育の営みも含めて、保育者を成長させる場となるのである。

第三に、保育者が語り合う時は、園の雰囲気、語り合う者同士の関係性等が重要になってくるということである。歴史史料や現在の実践事例でも指摘してきたように、園長をはじめ保育者を指導する立場の尊敬する保育者の存在や保育者同士で語り合うことを尊重し合い安心できる雰囲気では、保育者らが積極的に相談したり意見したりできるのである。安心できる和やかな寛容な雰囲気は、あたたかいまなざしによって醸し出され、またあたたかいまなざしは寛容な雰囲気の中で生み出されていくのである。こうした中で、保育者たちの人間的な成長を促していくと考えられるのである。

つまり、保育者同士が互いの理念を尊重し合い、どのような場でも本音で自身の内面を表出し語り合うことで、各々の考えや視点を知ることになり、新たに保育の営みを考えることに繋がるの

である。保育者同士だけではなく、保護者と語り合う時も同様である。様々な人と関わりあい、多様な価値観に触れ、相手を受容することで自己と他者との共感を生み出すとともに、よりよい子どもの育ちに向けた親との共同の保育観へと変容していくのである<sup>(13)</sup>。このような自分の考えを相手に伝えることや、相手の価値観を知る、受け入れること、こうした営みは、保育における子どもたちが成長していく姿と類似する点でもとも言え、保育者にとって安心して働ける場に繋がるのではないだろうか。語り合うということは、人格と人格が触れ合う営みであり、あたたかいまなざしと寛容な雰囲気が連鎖している場であると言える。

#### 〈付記〉

本稿は、日本乳幼児教育学会第31回学会大会自主シンポジウム「保育者の多様な語り合いの場に観る人間性の育ちを考える—自己確立を生み出す場、間の在りようを探る—」（谷昌代・熊田凡子・赤木敏之・藤井千里）の内容から、谷昌代と熊田凡子が保育者の語りに見る人間性の育ちに着目し、語り合うことの本質的意義を中心に考察しまとめたものである。

また、本稿は科学研究費基盤研究（C）（一般）「昭和戦前から戦後の日本での女性宣教師の教育活動の継続性と歴史的意義に関する研究」（課題番号 21K02270）（研究代表者 熊田凡子）による研究成果の一部でもある。

#### 《注》

- (1) 厚生労働省編『保育所保育指針解説』フレーベル館、351頁。
- (2) 大豆生田啓友『倉橋惣三を旅する21世紀型保育探求』フレーベル館、2017年、112頁、146-147頁。
- (3) 有沢孝治「保育士と教師の職場の人間関係に関する検討—対人ストレス、人間関係論、同僚性、心理教育の観点からの分析と考察—」『東海大学紀要文化社会学部』第3号、2020年、86頁。
- (4) 本吉大介・網野弘美「保育者の対人ストレスの認知的評価とソーシャルスキルの関連」『健康心理学研究』27号（1）、2014年、45-52頁。
- (5) 『明治41年4月 私立英和幼稚園 幼稚園記録』『昭和11年4月改 幼稚園記録 北陸女学校附属第一幼稚園』

園』及び『昭和23年4月11日起 北陸女学校附属幼稚園 日誌』が北陸学院史料編纂室に所蔵されていることを筆者熊田凡子が確認している。北陸学院第一幼稚園のキリスト教保育の営みが継続してきたことを裏付ける重要な史料である。

(6) 本稿で扱う北陸学院第一幼稚園『教師会』の記録は、1952(昭和27)年から1979(昭和54)年までの教師会の内容が記録されたもの15冊であり、北陸学院史料編纂室に所蔵されている。

(7) 1986(昭和61)年以降1990(平成2)年10月に至るノート『教師会』4冊より筆者熊田が確認している。東洋英和女学院史料室に所蔵されている。

(8) 北陸学院第一幼稚園の『教師会』の記録によれば、教師会の内容(プログラム)は、およそ定着していたことが確認できる。例えば1954(29)年の記録においても同様である。

(1954(昭和29)年度の記録) 4月5日

司会 ライザー先生

・クラス

ばら 28名 井幡先生 ホール  
 ゆり 33名 石風呂先生 1.  
 すみれ 28名 星川先生 2.  
 きく 28名 荒木先生 3.

・入園式

司会 井幡先生

奏楽 荒木先生

9時半～10時 登園

10時～10時半 入園式

10時半から10時40分 分級

プログラム

入場

お祈り

挨拶

先生の紹介

歌

幼稚園の生活

・幼稚園の1日のプログラム

8時半～9時 ～ 9時半～10時 ～10時半～11時

ばら 登園 室内自由遊び 休息 外遊 室内 リズム

ゆり ♪ 室内自由遊び 外遊 休息 リズム

すみれ ♪ 外遊 休息 リズム 室内

きく ♪ 室内自由遊び リズム 休息 室内

4月行事

母の会 木曜日

教師会木曜(母の会の日)は水曜 11時半～12時半

・4月22日 母の会

15日 旧役員会

5月6日 新旧役員会(母の会1年のプログラム

について)

プログラム

1. 礼拝

2. 幼稚園の1日のプログラムについて

3. 新会員歓迎会(挨拶, 役員, 母の会について)

4. 報告(遠足, 雑巾, クラス, 先生)

・実習生について

4月10日より5月29日まで

寺嶋佳子 ゆり

小川静子 すみれ

瀬古富美子 きく

竹村敏子 ばら

(9) 北陸学院第一幼稚園「教師会」の記録によれば、「新学期」の準備や留意事項、「カリキュラム」の検討、1人1人の子どもの発達に関すること、行事の意味、保育者の役割や姿勢について、南信子が助言を行っている記録が多く残されている。つまり、南が実際の教師会で助言した内容が『キリスト教保育』の連載論説に発展した可能性がある。

(10) 「教師会」について、ランバス女学院附属幼稚園においては、1931(昭和6)年4月から開始されていたことが学校史より確認できる。「教師会は幼稚園、ナースリー・スクール合同で毎週木曜日の午後開催した。」(聖和保育史刊行委員会編纂『聖和保育史』聖和大学、1985年157頁。)[幼稚園教師会は、附属幼稚園及び関係幼稚園の教師たちが一同に会して、木曜日の午後に開かれた。ここでは、子どもの保育に関するあらゆる相談がもたれ、その時々教材研究の課題をもうけるまで発展していった。研究の成果として残っているものに、『幼児教育に関する書籍解題』『幼稚園、ナースリー・スクールに於ける設備品及び材料目録』などがあげられる。これらは教師たちの労作として評価したい。また、ここでは附属と関係幼稚園の連合運動会などの計画や相談も行われ、教師、子どもたちの連帯も育まれる場でもあった。](聖和幼稚園100年史委員会編『聖和幼稚園100年史』聖和大学、1991年、37頁。)

(11) 北陸学院第一幼稚園の『教師会』の記録によれば、昭和34年度の記録から「南先生のお話」「南先生より」「南先生の助言」という項目追記されており、南信子が語った助言内容が記されている。

(12) 本事例は筆者谷昌代による保育実践記録に基づくものである。

(13) 永田誠・磯邊友美・田中万里「保育者の語り合いを通した学びに関する考察：アトム・つばさ共同保育園の事例をもとに」『大分大学教育福祉科学部研究紀要』37号(2)、2015年、271-286頁。